# 『文心雕龍』雑説（三）

安東　諒

「道沿聖以垂文、聖因文而明道」（道ハ聖ニ沿リテ以テ文ヲ垂レ、聖ハ文ニ因リテ而シテ道ヲ明ラカニス）と原道篇にあったように、聖人は自然の神秘秩序を主宰する神理としての道を体現してそれを経書の文章に定着解明した。私たちは今も自然に日々対しているが、私たちは聖人ではないからその原理なる道を直に把捉し得ない。だから聖人の書き残した経書を通じてそれを模索するしかできない訳である。その意味では結句経典が唯一の手がかりとなる。その辺のことを下引の葉長青は指摘しているのであろう。仏教で仏・法・僧を三宝という。創始者としての釈迦・その教えの記録としての経典（内典）・それを伝播敷衍する僧。仏教の布教にはこの三つの存在が不可欠なることの謂いであろう。しかしそれも究極すれば経典に行き着く。禅宗では不立文字・教外別伝などと言うが、それはそれへ牽引され拘泥することの否定であり、文字や言葉そのものの否定ではないこと、悟達の方便としては必須であること、少しくその関係の文献を読めば瞭然である。言葉無くては思索などできはしないこと彼らも知悉していた。その辺の機微を上田閑照は「言葉から出て、言葉に出る」と簡潔に説いている（『禅仏教』――禅と言葉――岩波同時代ライブラリー142）。解は難しいが私なりのまとめをすれば「方便としての日常語から悟達の世界の真理語へ」ということに聞こえる。坐禅一途の暗証の禅師でもなく、経典耽読の文字の法師であってもならないこともまた自明である。道元はもっと極端に山水もまた経典だとまで言っている。文字に牽引され拘泥するな！とはそういう広い視野からの提言でもあった。しかし大蔵経の大部を見れば言葉文字典籍のいかに必要不可欠かは自ずと知れたことである。それは劉勰にとっても疾うに解っていたことだった。漢訳仏典が隆盛を極め始めたころ、彼はその翻訳目録を作るのに没頭していた僧であった。

宗経第三

［一］三極彝訓、其書曰経。経也者、恒久之至道、不刊之鴻教也。故象天地、效鬼神、參物序、制人紀、洞性靈之奥區、極文章之骨髓者也。皇世三墳、帝代五典、重以八索、申以九

邱。歳歴緜曖、條流紛糅。自夫子删述、而大寳啓耀。於是易張十翼、書標七觀、詩列四始、禮正五經、春秋五例。義既埏乎性情、辭亦匠於文理。故能開學養正、照明有融。然而道心惟微、聖謨卓絶、墻宇重峻、而吐納自深。譬萬鈞之洪鍾、無錚錚之細響矣（三極ノ彝訓、其ノ書ヲ經ト曰フ。經ナル者ハ、恒久ノ至道ニシテ、不刊ノ鴻教ナリ。故ニ天地ニ象リ鬼神ニ效ヒ、物序ヲ參シ、人紀ヲ制シ、性靈ノ奥區ヲ洞キ、文章ノ骨髓ヲ極ムル者ナリ。皇世ノ三墳、帝代ノ五典、重ヌルニ八索ヲ以テシ、申ヌルニ九邱ヲ以テス。歳歴ハ緜曖トシテ、條流ハ粉糅タリ。夫子ノ删述セシ自リシテ、大寳ハ耀キヲ啓ケリ。是ニ於テ易ハ十翼ヲ張リ、書ハ七觀ヲ標シ、詩ハ四始ヲ列ネ、禮ハ五經ヲ正シ、春秋ニハ五例アリ。義ハ既ニ性情ニ埏タリ、辭モ亦タ文理ニ匠タリ。故ニ能ク學ヲ開キ正ヲ養ヒ、照明ニシテ融キコト有リ。然リ而シテ道心ハ惟レ微ニ、聖謨ハ卓絶シ、墻宇ハ重峻ニシテ、而シテ吐納ハ自ヅカラ深シ。譬ヘバ萬鈞ノ洪鍾ニ、錚錚ノ細響無キガゴトシ）

経は縦糸。緯は横糸。織布の仕組みから経は主であり緯は従である。経あっての緯でありその逆はありえない。宗経・正緯と連篇するゆえんである。聖書にもアポクリファがあるように経書にも緯書がある。聖書正典の選に漏れたものが偽典・外典（ガイテン）とすれば、緯書はその成立の過程を異にする。それについては正緯篇でふれる。仏教にも外典（ゲデン、ゲテン）はあるが、これは仏教経典以外の書の称名だから前二者とは性質を全く異にする。

詹鍈の『義證』に引く葉長青の自印本『文心雕龍雜記』に「原道之要、在乎徵聖、徵聖之要、在乎宗經。不宗經、何由徵聖？　不徵聖、何由原道？　緯既應正、騷亦宜辨、正緯辨騷、宗經事也。舍經而言道、言聖、言緯、言騷、皆為無庸。然則《宗經》其樞紐之樞紐歟？」とある。原道・徵聖篇のみならず正緯・辨騷篇もまたつまりは宗經の事だし、宗經こそが核心の核心ではないか、と。何の核心なのか？　文心（内容）雕龍（形式）＝文章表現の核心の核心論だというのである。詹鍈も「按《徵聖》篇説「是以論文必徵於聖、窺聖必宗於經」「宗」是主。《原道》和《宗經》兩篇、實際上是劉勰用來探索文章的「源」和「流」的、不能割裂開來」と言っている。原道篇と宗經篇は源渚と流派の関係割裂のしようがない。宗は主なりとは葉長青の樞紐の樞紐説を踏襲する。文章表現にあっては究源よりは用派が主だと考えている。表現とは確かに応用（用心、配慮）の才に違いない。「夫文心者、言爲文之用心也」「古來文章、以雕縟成體」と序志篇冒頭にある。

三極彝訓は賛に同文がある。王利器『文心雕龍校證』（以下「校證」と略称）に「『三極彝訓、道深稽古』原作『三極彝道、訓深稽古』。鈴木云『案「三極彝訓」已見正文。此「道」、「訓」二字疑錯置。』案鈴木説是　今據改。」とある。三極は天地人。彝訓は常訓。恒常の訓教。不変の正しい教え。経は永遠の導き、不滅の大教である、と。天地から人紀までの三字四句の典拠を范文瀾は『禮記』禮運篇の文に徵するが、楊明照はそれは礼の専論であるからふさわしくないとして『漢書』の禮

樂志と儒林傳を引いている。戸田は二者の文を併掲するだけで判詞を加えないが、比読考察すれば楊に分があることは明白である。

「洞性靈之奥區、極文章之骨髄」とは経典は人心の奥所を貫き、文章の要点を究めている、と言うのであろう。人の心とその現れとしての文章の真髄を極め尽くしている経典、以下にその成立過程と効用を説いている。

三墳、五典、八索、九邱は遥かなる往昔の旧き典藉の名前らしいが、長い時代の隔たりの中に複雑に衆雑して、今はそれを詳しく知る術がない。『春秋左氏傳』の昭公十二年の條に「左氏倚相、是能讀三墳五典、八索九邱」とあり、杜預の注に「皆古書名」とある。孔穎達の疏には孔安國の尚書序を引いて更に詳しい説明があるが、要約すれば、三墳は三皇の書(墳)で大道を説き、五典は五帝の書で常道を説き、八索は八卦の義を求索した書で、九邱は九州の地理物産を聚（邱）集した書であったらしい。賈逵の解詁は前二書は同説だが、八索は八王の法で、九邱は九州亡國の戒書だと言っている。李詳は『文心雕龍補注』に「劉勰は賈逵の説を用いていて、孔安國の説は依るにたりない」と。李曰剛は「後二説は孔説は賈逵より勝れているし、偽書にもそれなりの根拠は有るのだから全廃すべきではない」と。筆者には、判断の術が無い。「歳歴緜曖、條流粉糅」は永い歳月の間に古典藉の入り乱れたことを言う。だからこそ孔子の删述整理を必要とした。数字の羅列は実数は勿論だろうが、駢文の飾辞をも配慮していよう。劉勰は論理的思考に特に秀でていて分析の名手でもあった。「義既埏乎性情、辭亦匠於文理」は内実外華の兼備への称賛である。孔子の古典整理の功績を簡潔にまとめた名文だと思う。

埏（諸本には、極、挺、に作るものがある）の字は戸田、『義證』共に引く趙萬里《校記》の「埏」字を肯定して傍証する斯波六郎の『札記』説が妥当であろう。工匠に対する陶冶である。ここでは述辞。たくむ（他組む）とねやす（粘弥す）の意であろう。経典は内容面では民情を陶（埏）冶するものであり、形式面では文美を巧妙にするための模範の役割を担っている。だから能く後学を導き大道を歩ませて、その輝きは永久に絶えることがない。「道心惟微」は原道篇の賛に既出の語だった。また正文には「爰自風姓、暨于孔子、玄聖創典、素王述訓、莫不原道心以敷章、研神理而設教」とあった。その幽微な道心を原尋してそれを文章化し、また神秘な摂理を研究して民を教化し得た者が玄聖と素王であった。玄聖は直接には庖犧を指すが、ここでは三、五、八、九の数詞を冠す諸典の作者とされる古代の諸皇帝をも含んでいると考えて良い。素王はもちろん聖人孔子。

「とは言うものの、天地自然宇宙の運行を主宰する核心の道は至微玄妙で把束し難いものだが、聖人孔子の卓偉抜群の思考力とその屹然聳立する見識から吐出する深遠な言語の結実の著作としての経典は、大音声を発する巨大な鐘と同じで決して小さな鈴の音のような微音を立てることはない」

「吐納　本道家鍊氣之術也」と『斠詮』にある。道家の呼

吸法である。しかし斯波の指摘するように、ここでは吐の一義。音声言語。書面語に敷衍することは言うまでもない。偏義複詞である。

［二］　夫易惟談天、入神致用。故繫稱、旨遠辭高、言中事隱。韋篇三絶、固哲人之驪淵也。書實記言、而詁訓茫昧。通乎爾雅、則文意曉然。故子夏歎書、昭昭若日月之代明、離離如星辰之錯行、言昭灼也。詩主言志、詁訓同書。摛風裁興、藻辭譎喻、温柔在誦。最附深衷矣。禮以立體、據事制範。章條纖曲、執而後顯。採掇片言、莫非寶也。春秋辨理、一字見義。五石六鷁、以詳略成文、雉門兩觀、以先後顯旨。其婉章志晦、諒以邃矣。尚書則覽文如詭、而尋理卽暢。春秋則觀辭立曉、而訪義方隱。此聖文之殊致、表裏之異體者也。至於根柢盤固、枝葉峻茂、辭約而旨豐、事近而喩遠、是以往者雖舊、餘味日新、後進追取而非晚、前修久用而未先。可謂太山徧雨、河潤千里者也（夫レ易ハ惟レ天ヲ談ジ、神ニ入ッテ用ヲ致ス。故ニ繫ニ稱ス、旨ハ遠クシテ辭ハ高ク、言ハ中リテ事ハ隱ルト。韋篇ノ三タビ絶ツハ、固ヨリ哲人ノ驪淵ナレバナリ。書ハ實ニ言ヲ記スモ、而モ詁訓ハ茫昧ナリ。爾雅ニ通ズレバ、則チ文意ハ曉然タリ。故ニ子夏ノ書ヲ歎ジテ、昭昭ナルコト日月ノ代ルガハル明ラカナルガ若ク、離離タルコト星辰ノ錯行スルガ如キトハ、昭灼タルヲ言フナリ。詩ハ志ヲ言フヲ主リ、詁訓ハ書ニ同ジキ。風ヲ摛キ興ヲ裁チ、藻辭ハ譎喩シテ、温柔ニテ誦スルニ在リ。最モ深衷ニ附ス。禮ハ以テ體ヲ立テ、事ニ據リテ範ヲ制ス。章條ハ纖曲ナレド、執リテ後ニ顯ル。片言ヲ採掇スルモ、寶ニ非ザルハ莫キナリ。春秋ハ理ヲ辨ジ、一字モテ義ヲ見ス。五石六鷁ハ、詳略ヲ以テ文ヲ成シ、雉門兩觀ハ、先後ヲ以テ旨ヲ顯ス。其レ婉ナレドモ章ラカニ、志セドモ晦ク、諒ニ以テ邃シ。尚書ハ則チ文ヲ覽レバ詭ナルガ如キモ、而モ理ヲ尋ヌレバ即チ暢ブ。春秋ハ則チ辭ヲ觀レバ立チドコロニ曉ルモ、而モ義ヲ訪ヌレバ方ニ隱ル。此レ聖文ノ殊致ニシテ、表裏ノ異體ナル者ナリ。根柢ハ盤固ニシテ、枝葉ハ峻茂シ、辭ハ約ナルモ而モ旨ハ豐カニ、事ハ近キモ而モ喩ハ遠キニ至リテハ、是ヲ以テ往ク者ハ舊リタリト雖モ、餘味ハ日ビニ新タニ、後進ノ追取スルトモ而モ晩キニ非ズ、前修ノ久シク用ヒタルモ而モ未ダ先ンゼズ。太山ノ徧ネク雨フラシ、河ノ千里ヲ潤ホスト謂フ可キ者ナリ）

五経の内容とその効用を簡潔に説く。「辭約而旨豐、事近而喩遠」がその結論である。言辞は簡約なるも意旨は豊富であり、事例は卑近なるも比喩は深遠である、と解せるがこの二句は互文であろう。もちろん旨約而辭豐、喩近而事遠の意も含まれていることは上文の『尚書』『春秋』の文章解明からもたやすく推測しうる。文章の形式と内容という面から言えば、字面と含意の難易に二分できると言いたいのであろう。一見すれば容易のようだが含意は深いもの、見るからに難解そうだが喩旨は理解に容易なものもあるということである。その具体的箇条分析が次章の《六義》でなされている。

またこの章の冒頭の文「易惟談天」より「表裏之異體者也」

までの部分が王粲の「荆州文学記官志」に本づいた文章だという説が范氏注に陳漢章の見解として引かれて、范氏はその文が『藝文類聚』三十八『御覽』六百八に有ると丁寧に出所を記したが、それは嚴氏輯の全後漢文からの孫引きで今の二書には王粲の「荆州文学記官志」にこの文が無い。元よりその誤りは嚴氏が参看した版本にあったこと『楊校』に詳しい。王粲の原文を范氏が実見すれば済んだことだが、いかな大家にもこういうことが偶にはあるということだろう。

「韋篇三絶」の語は易が難解の故に多読して韋装が三絶もしたのではないと范注引の焦循『易圖略』にある。「正是解得其參伍錯綜之故、讀至此卦此爻、知其與彼卦彼爻比例、遂檢彼以審之、由此及彼、又由彼及此、千脈萬絡、一氣貫通、前後互推、端委悉見、所以韋編至於三絶、若云一見不解、讀至千百度、至於韋編三絶及解、失之矣」その内容が交雑輻輳の為に前後の各卦爻を何度も何度も交互に参看して始めて全体を見通し得るというのであろう。これもまた難解の一である（千脈萬絡ナルモ一氣ノ貫通シ、前後互ヒニ推セバ端委ノ悉ク見ハルとは広い意味でのコンテクストの読解の謂いであろうから）が、焦循はそれを単なる手順の繰り返しと見ていたのであろうか。「固哲人之驪淵也」の驪淵は驪龍の住む深淵、典拠は『荘子』。『義證』には「此謂《易經》蘊藏「精義」、對哲人而言、實爲具有無價之寶的淵源」とある。易は精言奥義を蘊蓄秘蔵している、だから聖哲にとっては無上の宝庫だ、と言うのであろう。

「通乎爾雅、則文意曉然」黄叔琳の『文心雕龍輯注』に「爾雅本以釋詩、無關書之訓詁」の語があり、爾雅は本より詩経の釈書であり書経の訓詁とは関わらないと言うが、これは強ちそうでもないことが郝懿行によって批判されている。「哉生魄爲證、其他釋書者不一而足、安得謂與書無關」「練字篇云爾雅者詩書之襟帯、據此一言、益知此注之批繆」前文は良いとしても、黄氏は劉勰自信の誤解を指摘しているのだから後文は反証にはなり得ないのではないか。『爾雅』は確かに大部分が『詩經』の読解に裨益するかに見えるので黄氏の見解にも一利はあるように思うが。

「温柔在誦。最附深衷矣」『禮記』經解に「温柔敦厚詩教也」という有名な句がある。後世の詩論詩話で詩の根本奥義のごとく重宝される一句である。温厚柔和。詩は志だから人が心根として常に内持するべきものと考えてもよい。温もり柔らかさは、凪ぎ、和む、慰むなども和に連なる一連の大和言葉であろう。そうならそれらはまた儒教でいう「中庸」とも近い位置にある心の持ち方構え方でもあろう。しかし礼は詩より少し厳しい。

「禮以立體」「立體は明體」（范注）兩京本「立體」下有「功用」二字、後人妄附、宜删と橋川時雄の『文心雕龍校讀』に有ると詹鍈の『義證』にいう。筆者は橋川の書は未見だが詹鍈の簡介によればタイプ印刷で冒頭五篇のみだという。戸田本も触れていない。斯波先生の『札記』は四篇までだが、この両人の校勘は実に緻密で詹鍈はしばしばそれらを引用して

いる。隣国の斯学の先達に対するその誠実な態度には頭が下がる。

詹鍈は「用來建立體制或准測」という。體制は根本原則。準則はその具体化。また「據事制範」は「根據事理來制定規範」という。事理は事物・情理。物事とそれに関わる情況定理に基づいて社会の規範作りをする。そういう周到な用意が規則を作るには必要不可欠である。「趨時必果、乘機無怯、望今制奇、參古定法」と通変篇の賛にある。時代を越えて為政立法者にとって不可忘の心得であろう。一九八八年の広州の暨南大学主催の『文心雕龍』国際研討会の折り、筆者の色紙の需めに応じて詹鍈教授はこの後二句を認めて下さった。現代の中国文学界の老大家の心の在り拠が察せられ感慨深かった。

「章條纖曲、執而後顯」の纖曲は「禮儀三百、威儀三千」（『禮記』中庸）を念頭に置いていることは容易に類推しうる。その真の有意義は実行してみて始めて明らかになるというのである。「採掇片言、莫非寶也」の片言の語は史傳篇に「褒見一字、貴逾軒冕、貶在片言、誅深斧鉞」と見え、『春秋』の毀誉褒貶の片言隻語が軽視しえない重要なものであることを強調している。それは次の句と密接する。「春秋辨理、一字見義」辨理は事理を弁析すること。事理は先に『禮記』にあった。事物・情理を弁析説明する為に片文隻字に褒貶の意義を罩めて表現する、春秋のあの微文大義の真骨頂である。

「五石六鷁、以詳略成文」「雉門兩觀、以先後顯旨」「按説文無鷁字」と橋川はいう。我邦の龍頭鷁首の鷁だが正字は鵖で『説文』にもそれがある。「この鳥は［荘子、天運］に、「夫れ白鵖の相視るや、眸子（ひとみ）運かさずして風化す」とあり、相視るのみで孕んで卵を生むという。雁に似た鳥ともされるが、「実体は知られない」と『字統』にある。ここは春秋の文章が詳述と略述の微妙な使い分けをすることを説いている。また文字を前後させて意義の比重を明らかにすることを後句では説いている。

「其婉章志晦、諒以邃矣」斯波はこの婉章志晦の文字一句は『左傳』成公十四年の「故君子曰、春秋之稱、微而顯、志而晦、婉而成章、盡而不汗、懲惡而勸善」の総てを含有していると見る。なお詹鍈の引く明の屠隆の「文論」には、「聖人の堅固な道術と経書を讃え「易の沖玄(奥深さ)、詩の和婉(なごやかさ)、書の荘雅（みやびさ）、春秋の簡厳（きびしさ）」は後世の文人学士の纖穠佻巧（なよなよふわふわ）の態は無く、その風骨の品格の威厳は千古を睥睨している」とあり、とりわけ「礼記・檀弓と周礼・考工記はその最たるもので正に山峰の高く聳え波涛の重なり波立ちて、その姿態の横溢する様はまことに文章の壮観だ」ともある。

「尚書則覽文如詭、而尋理即暢」「春秋則觀辭立曉、而訪義方隱」はその文辞、義理の内容と形式からの考察である。尚書の句の詭の意味は解しにくいが前文の書と詩が詁訓茫昧であると言っていることに通うであろう。しかしそれも『爾雅』に精通すれば文意暁然と有るので意味内容に暢通することに

なる。詭は譎詭奇異、韓愈のいう例の佶屈聱牙であろう。その反対に春秋は見かけは解り安いがこと内容になると曲隠になってしまう。聖人の文章はこのように異殊の韻致に富みしかも文体は表裏あい異なる。これは言の尚書と事の春秋の相違だ、とは斯波の説である。ここでは五経の内の二経しか論じてないのは脱文があるであろう、という研究者もいるが楊明照は既に上文に有るからこれでいいと。ここは経書＝聖人の文に殊致、異体の情采の二法があることを言わんための劉勰の説論だから、筆者は楊に従う。

「至於根柢盤固、枝葉峻茂」「もと於字が無いが、敦煌本には有る」と戸田は言い「至於」の例文を史伝篇・通変篇から引いて「本書には多くの用例があるので、敦煌本によって於字を補った」と記す。いま朱迎平編『文心雕龍索引』に就いて見れば（後に四字句が来るものに限定）「至於」の例文（後に四字句が続くもののみに限定）24例、「至」の例文21例ある。序でに「至如」「至若」の例文が11例ある。「於」の字を使うか使わないかは単に整句の問題ではなく劉勰の恣意であったように思う。「盤固」はもと「槃深」に作っていたが敦煌本は「盤深」とあると。斯波は「固」の方が結びつきはよいと言う。意味は大分異なるが字面からは根柢の木偏、音韻からはバンとシンのn音の揃いで「槃深」の方が「峻茂」との対の関係からも良いかと思う。またこの文には提示の説明の句が無いので脱文が有るのではないか？と斯波は言い「これが五経共通のことである」という意味の句があるべきではなかろうか、と言っている。確かに「至於」から「是以」に直接するのは（大胆な省略とも取れなくはないが、それにしても）大いに不自然である。

「辭約而旨豐、事近而喩遠」言辞と内容の縮約と豊富。事類と比喩の卑近と深遠に就いて言う。

「是以往者雖舊、餘味日新」往者は五経を指すと『義證』にある。五経は時を旧り経ているが内含の余香は今に新しいと。

「後進追取而非晩、前修久用而未先」未先と非晩は相対して文を為す、と潘重規は（『唐寫文心雕龍殘本合校』）言う。未先は「未有前於此也」直解に「爲未嘗超先」と『斠詮』にある。これまでの俊秀も五経を超越する文章を書いた者はいないと。

「可謂太山徧雨、河潤千里者也」五経の恩恵は、泰山黄河の如くこの地上（世界）を雨潤する。どこまでもどこまでも地上に慈雨し浸潤する水のイメージとして劉勰は五経を捉えていた。仏教でいう甘露法雨などを連想すれば良いのだろうか？徧の和語のアマネシは天と雨に通じる言葉である。

［三］　故論説辭序、則易統其首、詔策章奏、則書發其源、賦頌謌讚、則詩立其本、銘誄箴祝、則禮總其端、紀傳盟檄、則春秋爲根。並窮高以樹表、極遠以啓疆。所以百家騰躍、終入環内。若稟經以制式、酌雅以富言、是卽山而鑄銅、煮海而爲鹽者也。故文能宗經、體有六義。一則情深而不詭、二則風清而不雜、三則事信而不誕、四則義直而不回、五則體約而不

蕪、六則文麗而不淫。揚子比雕玉以作器、謂五經之含文也。夫文以行立、行以文傳。四教所先、符采相濟。邁德樹聲、莫不師聖。而建言脩辭、鮮克宗經。是以楚豔漢侈、流弊不還。正末歸本、不其懿歟（故ニ論・説・辭・序ハ、則チ易其ノ首ヲ統ベ、詔・策・章・奏ハ、則チ書其ノ源ヲ發シ、賦・頌・謌・讚ハ、則チ詩其ノ本ヲ立テ、銘・誄・箴・祝ハ、則チ禮其ノ端ヲ總ベ、紀・傳・盟・檄ハ、則チ春秋根ヲ爲ス。並ビニ高キヲ窮メテ以テ表ヲ樹テ、遠キヲ極メテ以テ疆ヲ啓ク。百家ノ騰躍スルモ、終ニ環内ニ入ル所以ナリ。若シ經ニ稟ケテ以テ式ヲ制シ、雅ヲ酌ミテ以テ言ヲ富マサバ、是レ山ニ卽キテ而シテ銅ヲ鑄、海ヲ煮テ而シテ鹽ヲ爲ル者ナリ。故ヨリ文ハ能ク經ヲ宗トスルニ、體ニ六義有リ。一ハ則チ情ハ深キモ而モ詭ナラズ、二ハ則チ風ハ清キモ而モ雜ナラズ、三ハ則チ事ハ信ナルモ而モ誕ナラズ、四ハ則チ義ハ直ナルモ而モ回ナラズ、五ハ則チ體ハ約ナルモ而モ蕪ナラズ、六ハ則チ文ハ麗ナルモ而モ淫ナラズ。揚子ノ玉ヲ雕リテ以テ器ヲ作ルニ比セシハ、五經ノ文ヲ含ムヲ謂ヘバナリ。夫レ文ハ行ヲ以テ立チ、行ハ文ヲ以テ傳ハル。四教ノ先トスル所ニシテ、符采ハ相ヒ濟ス。德ヲ邁メ聲ヲ樹ツルニハ、聖ヲ師トセザルハ莫シ。而ルニ言ヲ建テ辭ヲ脩ムルニ、克ク經ヲ宗トスルモノ鮮シ。是ヲ以テ楚ハ豔ニ漢ハ侈ニシテ、流弊シテ還ラズ。末ヲ正シテ本ニ歸ルハ、其レ懿カラズヤ）

「故論説辭序、則易統其首」以下五経に淵源する各文体を並記する。

「詔策章奏、則書發其源」『斠詮』に「顔之推謂檄原於書、劉勰則原於春秋、劉謂章奏原於書、顔則以書奏原於春秋、此其不同之處、然而書與春秋同爲史則一」とあり、顔之推（『顔氏家訓』文章篇）と劉勰の文体分類の異同を指摘する。檄と章・奏と書・奏の淵源（尚書と春秋）の不同を指摘する。しかし（文体としての）書は春秋と同じく歴史に分類していたことは共通していると。

「賦頌謌讚、則詩立其本」『斠詮』に「劉言贊而未言詠、顔言詠而未言贊、但歌詠相類、頌贊相近、要其大體、亦無出入」とあり、劉勰は贊（讚）と言い顔之推は詠と言っていると。ただ歌（謌）と詠、頌と贊は類（似）近（似）していて大体において相同であると。

「銘誄箴祝則禮總其端」『斠詮』に「惟劉言銘與箴原於禮、顔則以爲原於春秋、此其相異之處」とある。公的な礼が実行され記録されたとき、それは歴史に転換することも有り得る訳だからこの二者にはそれほどの逕庭は無いのかもしれない。それは先々条の尚書と春秋の関係にも言えるだろう。

「紀傳盟檄、則春秋爲根」黄侃の『札記』に「記傳乃記事之文、盟檄亦論事之文耳」とある。記事と論事は客観主観の相違か？

「並窮高以樹表、極遠以啓疆」高遠を極限まで窮め尽くした五経はその本体応用共に最高水準にあるということか？

樹表、啓疆の意は捉え難いが、張立齋の『文心雕龍注訂』に「樹表者建立體裁以爲准則、啓疆者開拓範圍以爲利用」と

ある。後文の意は解し難いが、前文が本体なら後文はその応用利用の意味か？『斠詮』の直解に「五者樹立文章之體類、來源最古、開闢後學之疆宇、流澤孔長」と有るのから推せば「流布された恵沢は甚だ広範囲に渡る」ということか？

「所以百家騰躍、終入環内」この百家は「思想史上の諸子百家よりも指すところは広く、文学に従事するすべての人を指すと解すべきであろう」と戸田は言う。孫悟空の縦横無尽の活躍も所詮釈迦の掌上内と言うのだろう。

「若稟經以制式、酌雅以富言」この二句も前々条と同じく五経の本体からその体式を承けまたその使用言語の応用利用面としての『爾雅』の重要性を説いている。

「是卽山而鑄銅、煮海而爲鹽者也」典拠は『史記』呉王濞傳であることが『文心雕龍校注』に引く李詳の補注から知られる。楊明照の『校注拾遺』によれば「卽山鑄錢、煮海水爲鹽」とあり、索隱に「卽者就也」とあると。斯波は「この「卽山而鑄銅、煮海而爲塩」は文を作る者にとって、経書は無尽蔵の宝庫であることを譬喩的にいったのであって、前段の終りに「可謂太山徧雨、河潤千里」の譬喩を以て経書が文を作る人人に対して無限大の恩恵を与えることをいったのと、相呼応してをる」と。これで文意も瞭然である。

「故文能宗經、體有六義」文は能く経を宗とす。これが本篇名の由来である。「宗」の一字を一言で括ることは困難だが、祖先の御霊屋がその原義ならそれを尊崇して拠り所とする、というのがここの意味に近いか？　饒宗頤『文心雕龍探原』劉勰文學見解之淵源に「彦和〈文心〉、力主宗經、與子野持論宗旨相符、不特説明各種文體皆導源于〈五經〉、且極力于經書中探索「文」之意義、以立其建言之根據」と明解な要約がある。中村元の『仏教語大辞典』は「宗」を尊・主・要の意、と解している。馮春田の『文心雕龍』語詞解釋は「宗経」を「宗法、尊奉儒家経典」と解している。「宗法、尊奉」は「むねとしのりとし・とうとびたてまつる」と並列の動詞に訳すのであろう。『義證』に體は体製なりと。付会篇の体製の四条（情志を神明と為し・事義を骨髄と為し・辞采を肌膚と為し・宮商を声気と為す）を引いて「可見體製包括情志、事義、文辭等方面。義、宜也、善也」とある。辞采と宮商を文辞等にまとめたのだろうが要するに文章の内容と形式のこと。以下にその六義が述べられるが一二三四が内容（佩実）五六が形式（含華）についてである。

「一則情深而不詭」『義證』に「感情深摯而不詭詐」と。
　こころねすぐにまことあり。

「二則風清而不雜」『義證』に「風格清純而不駁雜」と。
　ふぢから（文力）すがしくみだれなし。

「三則事信而不誕」『義證』に「敍事眞實而不荒誕」と。
　ものことなおくいつはりなし。

「四則義直而不回」『直解』に「義理堅正而不邪」と。
　いみまさしくよこしまなし。詹鍈は「回は回邪」と。

「五則體約而不蕪」『義證』に「文體（風格）簡練而不蕪雜」
　かたちねれてすっきりと。

「六則文麗而不淫」『義證』に「文辭雅麗而不淫蘼」と。

ことばみやびにかざりすぎず。

『札記』に「此乃文能宗經之效、六者之中、尤以事信、體約二者爲要、折衷羣言、俟解百世、事信之徵也、芟夷煩亂、剪截浮辭、體約之故也」要は内容の真実と形式の簡練。文学が経書から学ぶべき二大要点。とは言うものの『義證』に「其實情深是首要的」と言うようにその実は情志の主要性。詹鍈は更に曹學佺の「此書必以心爲主、以風爲用、故于六義首見之、末則歸之以文、所謂麗而不淫、即雕龍也」という見解を引いている。この見地から本書命名の由来を探れば『文心雕龍』は〈文の心と雕龍〉ということにでもなろうか？

「揚子比雕玉以作器、謂五經之含文也」唐写本は揚字の上に故字がある。前文を受けて雕龍の必要性を説くのなら有った方が自然である。またこの一句は後続の正緯・弁騒篇の伏線の役割をも荷っている

「夫文以行立、行以文傳」文と行の相互補完の関係を説く。

「四教所先、符采相濟」四教は『論語』の「文・行・忠・信」忠・信に先んずる文と徳行。「符采相濟」は斯波に懇切な解がある。「この二句をすらりと読めば(筆者注――文脈と韻調から素直に（ストレートで渋滞しないこと）という意をこめたものか？)、「符」は「行」を承け、「采」は「文」を承けたものと見られる」と。しかし符と采をこのように分解せず、二字を一語に解するのが六朝の作品に屢見する通例だとして例文を掲げている。分解した用例が未だ一つも見当たらないと。「さうするとここの「符采相済」は「この文と行との二つが互に表裏となって符采をなす」といふやうな意味と見なくてはならぬのではあるまいか」と慎重である。斯波の札記はこのように至る所懇切慎重でその学究態度の謙虚さは驚くべきものである。この仕事が冒頭四篇のみで終わらずもし完成していたならば、後学への裨益は多大なものであったろうこと、戸田も疾うにそのことを指摘しているように誠に遺憾である。

「邁德樹聲、莫不師聖、而建言脩辭、鮮克宗經」徳声の実現には聖人を師とするが、言辞に経を宗とする者は少ないと。これは恐らく劉勰の本音であっただろう。聖人に対する畏敬の念より経書に対する尊崇の念の方が勝っていたのではないかというのが筆者の宿念だが、こういう何気ない言辞にそれを垣間みる。彼の仏教信仰者としての信念と照合しつつ。

「是以楚豔漢侈、流弊不還、正末歸本、不其懿歟」『校證』に「唐寫本正末作極正」と。非是と楊明照は言う。郭普稀は「末は当時の文風、本は五経の文風」と。饒宗頤『文心雕龍探原』に「彦和〈文心〉、力主宗經、與子野持論宗旨相符」は先に引いた。しかし相違点もある。王運熙・楊明著『魏晋南北朝文学批評史』裴子野の項に「一には劉勰は強力に屈原の作品を肯定するという前提の下にこれらのこと（楚豔漢侈、流弊不還等を指す――筆者注）を説いたということである。彼は正に楚辞と儒家の経典を並列して文学創作の二大模範と為していた。二には劉勰の出発点は近世の文風の奇異混乱への

不満にあったので、決して一般的文学作品を否定したのではなく、また決して詩賦作品の全てが政治教化に奉仕するべきだなどという狭隘な主張をした訳ではない」と言っている。政治教化の為の文学だけではなく、文学の為の文学をも視野に入れていたということだろうか？　でなければ正緯・弁騒篇も不要になる。

文心一書が序志篇に云うように、為文の用心ならば、冒頭五篇の枢紐論の中でもとりわけ本篇の宗経はその実際の効用（実作）において最も価値のある篇である。劉勰の宗経の態度心得は、唐代の古文復興家らの文章載道主義とは本質的に違う。「夫文以行立、行以文傳」とも言っているようにこの折衷的中立の態度こそが現代の私たちにも訴え掛ける何かを持っているということは忽視しない方がいい。目加田はこの一句を「文章は徳行を本として成立し、美徳もまた文章を通じて流伝する」と訳されている。この簡約と含意の深さ（辞約而旨豊）には味わいがある。とりわけ美徳の一語は出色であろう。こういう訳をさらりと（前掲の斯波のすらりとの語とも照合しつつ）やってのける学問の根柢の槃深と枝葉の峻茂にはただ脱帽あるのみ。

贊曰、三極彝訓、道深稽古。致化惟一、分教斯五。性靈鎔匠、文章奥府。淵哉鑠乎、羣言之祖。（贊ニ曰ク、三極ノ彝訓、道ハ深ク古ヲ稽フ。化ヲ致スコト惟レ一、教ヲ分ツコト斯レ五。性靈ノ鎔匠ニシテ、文章ノ奥府ナリ。淵タル哉鑠タル乎、羣言ノ祖、ト）

『文心雕龍斠詮』直解書き下し文

宗経篇第三（八十九頁～一一六頁）

壹（八九頁～九〇頁）

凡そ天地人の三才至極の道と其の善美の常訓は、往古の聖哲の書に載る者にして之を稱して經と曰ふ。謂ふ所の經なる者は乃ち永恒久遠の真理にして磨滅すべからざるの偉大なる言教なり。故に易は象を天地の文理に取り、禮は法を鬼神の降命に效ふなり。

詩書は事物の時序を參驗し、春秋は人倫の綱紀を制定するなり。五教の義理の純真は人性靈智の深奥の區域に通達し、語言の精美は文筆辭章の骨幹神髄を極盡する者なり。

傳説の伏羲・神農・黄帝の三皇世紀の三墳、少昊・顓頊・高辛・唐堯・虞舜の五帝時代の五典、之に加へて（しかのみならず）八卦の圖象を引述するの八索、九州の風物を敍記するの九丘は、年歳經歴の杳邈として明らかにし難く、枝條流派は紛岐糅雜せり。孔子の六經を删述して自從り以後、偉大なる寶典は以て光輝を開放せり。

是に於て易經は彖辭・象辭・繫辭の各おのの上下および文言・説卦・序卦・雜卦等の十翼を張大し、書經は六誓の義・五誥の仁・甫刑の誡・洪範の度・禹貢の事・皋陶謨の治・堯典の美等の七觀を標立し、詩經は國風・小雅・大雅・頌を陳

列して以て王道の興衰の由る所の四始を見、禮經は吉・凶・軍・賓・嘉の五項の經常の大禮を端正し、春秋は微なれども顯らかに・志せども晦く・婉にして章を成し・盡して汙げず・惡を懲らして善を勸むる等の五種の書法の義例を建立せり。

其の道義は既に能く人性の至情を揉和して、其の辭藻も亦た正に文藝の理則に巧合せり。所以に能く學者の意念を開發して愚蒙に正道を教養し、羣倫に示すに光明の前途を以てし、又た之をして長く令聞廣譽あらしむるなり。

然り而して天理に本づくの道心は異常に幽微にして、聖人に出づるの議謀は特殊に卓越し、夫子の修德講學は宮牆重淵にして高峻なるに、其の美富を窺ふべからず。羣經の立言含文は息養自然にして精深なるに、能く其の要妙を名づけ難し。譬ふれば重さ三十萬斤の巨鐘の絶へて金鐵錚錚の細響無きが如し。

貳（九九頁～一〇〇頁）

夫れ易經は惟れ天道を談説し、其の精粹微妙の義理は神化の境界に入りて能く人事の用を盡す。故に繫辭に稱す「其の旨は遠く、其の辭は文り、其の言は曲にて中り、其の事は肆にして隱る」と。意に謂ふ「易の旨意は深遠にして、辭語は文飾あり、其の立つる所の言は物に隨ひて屈曲すれども各おの其の理に中り、其の載する所の事は辭を放ちて顯露なれども其の義を索隱す」と。

孔子は晩にして易を喜み、翻讀之れ勤めて裝訂する所の皮帶の磨斷に致ること再三なり。其の作る所の贊易の十翼は自から聖哲の至文に屬し、珍貴なること啻だに九重深淵の驪龍の頷下の寶珠ならざらんや。

書經は實に古聖先王の懿言美行を記載して、其の古語奇字の注釋は渺茫暗昧にして瞭解し易からず。若し爾雅に讀通すれば則ち其の文意卽ち豁然として明曉す。故に卜子夏は書經を歎賞して云ふ「上に堯舜の道有りて、下に三王の義有り。昭昭として互ひに映じ日月の更代に光明するが若く、歷歷として相ひ次ぎ星辰の交錯に運行するが若し」と。其の文辭の照耀灼爍たるを言ふなり。

詩經は內心の情志を宣達するを以て主と爲し、字義の訓解は書經と相ひ同じきなり。風雅を抒布し比興を熔裁し、辭語は藻麗に勸喩は謠巧にして、諷誦の餘温と柔順は最も能く讀者の深衷に附合せり。

禮經は重くして社會羣倫の體統を建立し、人事に依據して規範を制訂するに在り。章節條目は纖細委曲にして、執行の後に益ます能く其の效用を顯著にす。日常に施きて片段を採取し或ひは一言を掇拾するとを論ぜず、寶貴の金華玉律に非るは莫きなり。

春秋は事理を辨章し一字の褒貶に由りて卽ち其の榮辱の大義を見るべし。僖公十六年の正月に「隕石于宋五」および「六鷁退飛過宋都」と書す二語の如きは、敍事の詳備を以て其の文義を成す。定公二年の五月に「雉門及兩觀災」と書すは災は實は兩觀從り起こるに據ればなり。其の「兩觀災及雉門」

と言はざる所以の者は雉門は尊く兩觀は卑ければなり。卑は以て尊に及ぶべからざるの故に雉門を先言して兩觀を後言せざるを得ざればなり。以て其の先尊後卑の旨意を顯見せり。其の婉曲成章、敍誌隱晦の二義の例は、屬辭比事の信に已に深遠なり。尚書の如きに至りては則ち其の文句を閲覧すれば詭秘に似る有るも、事理を尋究すれば卽ち暢通して滯ほることなし。春秋は則ち其の辭語を觀看すれば立ちどころに卽ち知曉するも、意旨を訪求すれば方に隱晦にして明らかにし難し。

此れ聖哲の文を爲るの特殊の風格にして、外在の文辭と内在の義理の各おの同じからざるの體裁有る者なり。

經書に至りては根柢之れ盤錯深固にして、枝葉之れ長大茂盛なり。文辭は簡約なるも旨意は豐實に、敍事は淺近なるも喩理は深遠なり。此れに因りて往聖の文章は古舊と雖然も但だ其の傳留の意趣は則ち日び益ます彌いよ新たに、後學は追求汲取するも遲晩と爲すに非ずして、前賢は經久運用せしも未だ嘗て超先せざるなり。其の衣被の廣大にして影響の久遠なること眞に泰山より起こるの雨露は天下に普霑して、黄河より來たるの水澤は千里を偏潤すると謂ふべき者なり。

## 參（一〇九頁～一一〇頁）

故に辯理の「論」・敍事の「説」・致意の「辭」・述要の「序」は則ち易經が其の頭路を統領す。帝王布令の「詔」・臣下應對の「策」・上書白事の「章」・進言按劾の「奏」は則ち書經が其の淵源を啓發す。體物寫志の「賦」・稱美盛德の「頌」・長言被樂の「歌」・表事助情の「贊」は則ち詩經が其の基本を建立す。器物に刻するの「銘」・行誼を累述するの「誄」・規誡を寓意するの「箴」・祭祀告神の「祝」は則ち禮經が其の端緒を總綰す。雜事を志錄するの「記」・史迹を轉述するの「傳」・誓約を記申するの「盟」・徵召露布の「檄」は則ち春秋が其の根柢を爲す。

五者は文章を樹立するの體類にして來源は最も古く、後學を開闢するの疆宇にして流澤は孔はだ長し。此れに因りて諸子百家が思想は粉紜し常道を超越すると雖も但だ終究に經典の範圍の内に落入す。經典を稟承して以て體式を製定し、風雅を酌取して以て言辭を豐富にするが若きは則ち啻だに鑛山に就きて銅錢を鑄り、海水を煮て食鹽を製するのみならざるなり。是を以て文を爲るに若し能く經典を以て本と爲さば則ち其の體裁に六種の利益有るべし。

一は是れ才情は深摯にして詭變せず。二は是れ風格は清純にして混雜せず。三は是れ事實は誠信にして怪誕ならず。四は是れ義理は堅正にして邪曲ならず。五は是れ體製は簡約にして蕪穢ならず。六は是れ文采は美麗にして淫靡ならず。

揚子雲が『法言』の寡見篇に美玉は必ず雕琢を經て後に器を成すと謂ふとは、五經は文采を含有するを説明するなり。

## 肆（一一四頁～一一五頁）

夫れ文章は德行を藉りて確立し、德行も亦た文章を藉りて

流傳し、孔門の四教は文を以て先と爲す。君子は必ず文行兼備すべく、堅貞の玉質有りて又た濟すに温潤の瑞采を以て始めて相ひ得て益ます彰らかなるべし。德業に勉進し風聲を樹立するに、聖哲を師法とせざるはなし。而るに言論を建立し文辭を修整するに、能く經典を宗主とすること鮮し。此れに因りて楚騷は綺豔にして詼詭、漢賦は侈麗にして誇誕、末を逐ひ本を棄てて下る毎に癒いよ況して風雅の正則に非ず。若し果して能く豔侈の末流を矯めて以て體要を端正にし、麗則の本眞に努めて以て雅言に歸反せば豈に美ならざんや。

伍（一一六頁）

贊詞に曰ふ

三才は至極にして常訓は字に垂ぶ　聖道は弘深にして往古を稽求す

化育を極盡するに惟れ經は一もて數ふ　政教を分施するに典籍は斯れ五なり

性靈を鎔鑄するに巧匠は運斧し　文章を述造するは秘奥の智府に

義理は淵博にして珠璣は呑吐し　百家は環内にして羣言の祖なり

『文心雕龍』試訳

宗経第三

天地人の三才（材）の恒常不変の訓教を記したものが経である。経の存在は真理不滅である。だから経書は天地を活写し、鬼神を奉習し、物質の秩序を参証し、人倫の綱紀を制定し、霊妙なる人間存在の深奥を洞察し、華実ある文章表現の芯髄を極尽したものである。三皇の世には『三墳』五帝の代には『五典』続いて易の八卦の意味を探求した『八索』また九州の物産を聚集した『九邱』などという書が有ったらしいが余りにも長い歳月の経過ゆえ、行く末紛々として今に確知しえない。孔子が古代の典籍を整理祖述してから、五経という大宝が輝きを発し始めたのである。『易経』に十翼、『書経』に七観、『詩経』に四始、『礼記』に五礼、『春秋』に五例とあるようにこうして五経それぞれその特色を示している。五経は内容面では人の心情をねやし、形式面では文の構成を巧みにした。だからそれらは学問世界に寄与し、正道の養成に役立ち、長い年月に色褪せることなく輝き渡っている。

とは言うものの、天地自然宇宙の運行を主宰する核心の道は至微玄妙で把束し難いものだが、聖人孔子の卓偉抜群の思考力とその屹然聳立する見識から吐出する深遠な言語の結実の著作としての経典の教えは、堵牆や宮殿のように幾重にも重なり高く、また深く幽かに自然の道の呼吸に呼応している。それはちょうど大音声を発する巨大な鐘のようで決して小さな鈴の音のような微音を立てることはない。

一体、『易経』は天道の微妙を説いたもので、その機微の説論は人生に善き効用をもたらす。だから繫辞伝にこれを称揚

して「内容は深遠で表現は華麗、言葉は的中し事態は隠微」と。孔子は晩年に易を好んで読みその為に綴じ韋は幾度も切れたと伝えられるように、この書は真に聖哲の幽微の思想を秘めた宝庫とも言える。『書経』は帝王や功臣の言動を記したものだが、言辞の訓みや意味は簡単ではない。しかしそれも『爾雅』に精通すれば文意たちまち瞭然となる。だから子夏は『書経』を賛嘆して「日月の交々に光り輝き、星辰の交々に巡り行るがごとし」と。『書経』の文は元来、天行のように明晰判明であった。『詩経』は詩人の情志の表明を使命とし訓義は『書経』に似て難解だが、それも『爾雅』に精通すればさほど困難ではない。六義を立て風刺と隠喩を使い、美麗の修辞と婉曲の諫諭を用いるが、その主意は「温柔敦厚」にあって読者の胸の深い所にまで届く。『礼記』は社会の体統（律・憲法）を確立したもので、事態に即して規範（令・規則）を制定応用する。その一一は委曲を尽くしていて実際に適用して始めてその意義が明確になる。だからどの一条目として無駄なものはない。『春秋』は事の是非を弁じ、わずか一字にさえも毀誉栄辱の意味を閉じ込めている。例証として挙げれば「五石六鷁」は詳悉と省略の例文であり、「雉門兩觀」は、書写の順序を以て事の尊卑軽重を巧みに書き分けている例文である。文辞の直叙婉曲によっての含義の隠微明瞭が複雑に錯綜していて、その含蓄は諒に深邃である。『書経』はその文意を見れば奇異であるが、筋道を辿ればたちまち了解できる。『春秋』は字面を見れば分かり易いが、含意を解こうとすれば一苦労する。これは聖哲の文章がその韻致（風格）を殊にして、各文体の特色が著しいからである。根はがっしりと堅固で枝葉は峻く繁り、文辞は簡潔だが意味は多様、事例は卑近ながらも内意は深遠であるのが五経に共通する特徴と言える。かくて往昔に書かれた五経は苔蒸しては来たが、その余香は日々に新鮮に薫る。後進の者らがそれを追い求めても時すでに遅しと言うことは無いし、先達の賢修の者らがこれを長きに渡って滋養としたがこれらの右に出るものは生まれなかった。これぞ泰山の慈雨、黄河の長流のそれに似てこの世を無際無限に浸潤する水そのもののようである。

さて論・説・辞・序という文体は『易経』がその最初であり、詔・策・章・奏という文体は『書経』がその淵源であり、賦・頌・歌・讃と言う文体は『詩経』がその大本であり、銘・誄・箴・祝という文体は『礼記』がその発端であり、紀・伝・盟・檄という文体は『春秋』がその根本である。総じて表現の高遠を極限まで窮め尽くした五経は、その本体応用（内容形式）共に最高の水準にあると言える。だから後世の幾多の文章家が表現に意を尽くしても結局はこの五経の最高水準を越えることは土台無理なことだった。もし経書に基づいて体式を制定し、『爾雅』を斟酌して文辞を豊富にし得るなら、それは山から銅を鋳出し、海から塩を煮出すに等しく正に五経は無尽蔵の宝庫となるだろう。元より文章は五経を宗法尊奉するがその体製の要諦は六項である。一には、こころねすぐ

にまことあり。二には、ふぢから（文力）すがしくみだれなし。三には、ものことなおくいつわりなし。四には、いみまさしくよこしまなし。五には、かたちねれてすっきりと。六には、ことばみやびにかざりすぎず。

だからこそ揚雄は五経を玉を彫って器を拵えることに比えた。玉でさえも彫刻によらねば工芸品となり得ないように、五経にも文彩は不可欠だと説いたのである。人の徳行は文章の善悪美醜を決定し、徳行はまた文辞の美醜を通して出来（伝播）する（この二句は牟世金の借訳。目加田訳は先掲）。文章と徳行は孔子の四教の始めを占め、この相互補完が表裏一体となって美文を成就する。徳行名声の実現には聖人を師と仰がない者はいないが、言辞の建立錬磨に経を宗とする者は稀である。かくて楚世の辞賦の過度の艶麗さと漢代の文賦の極端な華美は悪弊を今に流布し還元もおぼつかない有り様だ。当代の過美の文風の弊を是正して、五経の内実外華兼備の文章に立ち返り得るなら、何と素晴らしいことではあるまいか！

要説すれば
天地人を貫く不変の常理、聖人の教え深く学びは無限
教化の元は経典一つのみ、分かてば五部の門となる
これぞ精神の鍛錬、文辞の熟達に不可欠の宝庫
深遠なるかな！光輝なるかな！げに文章界の宗祖なり

（一九九七・八・八）